
でいぱいyouth

TOKIAME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいばいyouth

【NZコード】

N5117Y

【作者名】

TOKIAME

【あらすじ】

男女2人の視点から物語を読み解いてみよう。青春なんてくだらなくて、意味の分からぬものだけだけは言えようか？俺が、あたしが、人生の主人公だ。――現在、シグレ名義でテンミリオンにて公開中の作品。名前のみ変更しております。

プロローグ（前書き）

全部改稿、プロローグ。

プロローグ

青春が青春を裏切りました。

俺の幼馴染（仮）は初めての親友。
あたしの爆弾は一生処理できない。
僕の頭は誰にも理解できない。
私の恋は恋ではなかつた。

俺が見た世界は全て美しいもの。
わたしが恋したのは一匹狼？

俺が他人と話すのは自分に線引きするため。
自分の気持ちが理解できないのはいけない？
ボクが恋する的是愛だから。

私が持つのは余計な上背と義理人情。

人が人を信頼できないのも当然で、自分が嫌いなのも思春期で。
愛を恋と呼び、死を生と呼ぶ。

青い俺たちはまだ、青春に翻弄されていた。

あの頃、俺 宮本龍紀たつきは王様おうさまだった。

当時の俺は七歳。
大人でも扱うことの難しい高等魔術を、難なくやつてのけること
が出来る、若き高等魔術師こうとうまじゅつしだった。

炎を出して自由自在に扱うことが出来るのはもちろんのこと。
物質を創造する事によって文房具や生活用品、電化製品や、更に
は家一戸を創りだすことだって可能。
それを何処に置いておけばかかど、やつこととは聞かないでく
れ。
そんなもの、創つてもすぐに壊している。

どこのぞの鍊金術とかいうのと違つて魔術に代価や対価は無い。
大気中の魔力を少し頂くだけ。非常に便利。
魔術が無ければきっと俺は生きていけないんじゃないかな、と思
つていた。

いや、もちろん科学がここまで進歩していなかつたら、電化製品
を創造できることは無かつたけれど。

そして俺は数多い魔術師の中でも貴重な高等魔術師こうとうまじゅつしだから
少し、調子に乗つっていたのかもしれない。

* * * * *

小学校入学式、当曰。

『富本くもつて、高等魔術師らしこよ

そんな噂、もとい事実が学年中に広まつた。

その噂を聞きつけた同じクラスや他のクラスの同級生たちは、自然と俺の周りに集まつてきた。

同級生の中に他に高等魔術師はいなかつたから俺の所に集まつてきたんだろう。

集まつてきたやつには俺のとつておきの魔術を色々と見せてやる。

魔法律、といつものがあり、魔術は厳しく取り締まられてているが、そんなもの、ばれなければどうしてことはない。

ただの、形だけの法律なんだろ？

同級生から注目や羨望の的となつてその中心にいた、富本プロン

ト。
俺。

小学生ながらことでも、とてもいい気分だった。

ああ、こんな立場に居座るのも悪くないな、とそつ思った。

入学当初から毎日毎日そんな扱いを受けていたためか、いつしか俺は羊を率いる羊飼い。

よつするに、学年のコーダー的存在となつていた。

同級生の中に親友、と呼べる存在の人は一人もいなかつた。
けれど、悲しくはない。

自分を慕ってくれる人が居る。それだけで俺は満たされていた。

この学年は俺を中心として回つていて。
俺が、全てにおいて一番なんだ。

そう考えていた。

敵前逃亡（前書き）

赤石くん登場。

彼の性格が年の割りに大人びてるのは仕様です……

敵前逃亡

「君に靡くつもりなんて、毛頭も無いよ
「うへえ」

小学二年生になつた頃の事。

俺が上位の存在となつても靡かないやつは、当然だけれど学年の中でも数人はいた。

そいつらも態度では反抗心が俺に向いているのはよく分かるが、直に面と向かつて言つてきたのはこいつがお初だつた。

初めまして。

だからびっくりしちゃつて、うへえ。

こいつはニヤニヤとした笑みを浮かべてこそいるが、剣呑な目付きをしていた。

剣呑、というよりも下等な生物を見下すよつな目。

……ムカつくなあ。

「ああ、そう。ムカつく？ そりやそうだよねえ。

今までこうやって言われたこと無いだろ？

言わなくとも別に分かるんだよ。裸の王様、宮本龍紀くん。

君のその、表情とか分かりやすいんだよ？」

その話し方と口調でムカついた。

その物言いでさらにムカついた。うざい。

なんで反抗してくんだよ。何様だよてめえ。燃やすぞ。

頭の中でぐるぐると、黒い考えや罵倒の言葉が色々と回^{まわ}る。そこから、頭の中でぐるぐると、黒い考えや罵倒の言葉が色々と回^{まわ}る。

俺がそこいつの田を見据えながらただ黙りこくつてこないと、そこいつはくつと笑い、赤石瀬七、と言つた。

「憶えといてね富本くん。僕の名前。

それともこんなやつの名前憶える価値も無いってかな?

憶えといて損は無いよー、きっと。

それじゃまた、お邪魔しに行くよ。君の無意味な行動の邪魔を、

ね。

つて言つても、同じクラスだけねーーー！」

ははは、とそこいつ 赤石瀬七、と言つやつは、身を翻^{ひるがえ}し笑いながら去つていつた。

ていうか、あれ? あんなやつ同じクラスだつたっけ?

ていうか、居た? という感じ。

まあいいや。後でそこら辺のやつに聞いてみよう。

頭をわしわしと搔きながら、赤石と正反対の方向に歩いて行く。本当にイライラするなあ。後で目に物見せてやる。

そう思いつつ、こんなことも思った。

それにして、胡散臭い。

「天才的な才能を持つって、大変だねえ」

「……うるさいつ！」

小学六年生になつた頃のこと。

俺は、王の座から蹴り落とされた。

いや、自然と下へ下へと墮落していく羽目になつた。

羽目というのはおかしいかもしれないが、王から外れたのは確かだつた。

それは俺のせいでもあるけど、世の中の風潮とかのせいでもあつた。

俺が王様のような存在になれたのも魔力のおかげ。

ならば、その魔力が無くなってしまえば、俺のこの立場に存在意義自体が無くなるようなもの。

そう、俺の魔力は忽然と俺の中からその姿を消した。

パツ、とスツ、と一瞬にして消えたようなあの不思議な感覚は、今でも憶えている。

だからもう、炎を出すことも、空を飛ぶことも、物質の操作をすることさえもできなくなつた。

そちらへんにいる、ただの一般人。一般 people. ピーポー。

そこまで成り下がつた俺には当然のようすに誰も寄り付かなくなつた。

魔力が使えなくなつた途端だ。

でもその前にそいつらが俺の周囲にいたのは、高等魔術師であつたからだけだと気づいていればこんな事にはなつていなかつたかもしぬない、と今更後悔する。

親は頭の良い子と仲良くなりなさい、と呟つ。

馬鹿な子と一緒にいると悪い影響が出るわ、と呟つ。

そんな事は全くないといひのよ。

けれどまあ、それが世の中の親の考え方として定着しているのもあるから、俺の孤独化に拍車が掛かつたのは確かだつた。

俺は馬鹿だから、親に仲良くなるな、とか言われたやつは馬鹿正直に俺から離れていつた。

すると結果的に俺の存在、学校の中での価値は

『勉強のできない、運動馬鹿な出来損ないの男の子』

とか、そんな感じになつた。
というより、実感が湧いた。

今まで一人で、一人で音楽を聴くのが当時はとても悔しく、悲しかった。

ちくしょつ、俺が一体何をしたんだ、と。

家に帰るとベッドに潜り込み枕に顔を押し付け、涙で顔がぐしゃぐしゃになるまで泣き続けた。

嗚咽と涙がこみ上げ枕がぐしゃぐしゃになるまで泣き続け、そのまま眠りに落ちた。

敗北の感

翌日。

朝早く登校した俺が教室の扉を開けると、田の前に赤石がいた。

「…………うおっ」

「おひさまよーいじでこます？ 富本くん」

疑問系で挨拶した赤石は一ヤツと笑つてその場からピヨンシ、ヒ
一步分ジャンプして後ろに下がつた。

そしていつの日か見た、あの見下すような田付きで俺を一瞥する
と、すぐ傍にあつた机の上に座つた。

「んー、挨拶でさえ返してくれないのかい？ 富本くん。

他のクラスから君のためにわざわざ来てあげた同級生に一言もく
れてやらないなんて、冷たい男だね富本くん。

ほらほら、挨拶挨拶！！ 友好な関係を築くにはまず挨拶からつ
てね

ははっ、ヒヒも楽しそうに赤石は笑つ。

俺が眉を寄せて赤石を睨めば、そいつは不満そうに唇を尖らせる。

「（）」まで完璧に無視されるとはおもわなんだよーー。

これ位すれば大抵は挨拶とか返してくれるのにねえ。ま、それも
怒りながらだけど。

何がそんなに不満なのやら。全く理解できないよ

「…………んな挑発されるよつこ話されたら返す言葉もねえよ」

俺がやつと言葉を返すと、赤石の頬が一やつと緩み口元は一タツと歪んだ。

赤石が手を上げ、俺に向かって、いつに来ことでもせりゆつよつて、前後に振った。

手を伸ばせばぎりぎり赤石に触れられるかどうか、くらに近くに寄つてやると、赤石は俺の手をじつと見つめてきた。

相変わらずあの不^{ふしつけ}羨^{うらやま}な瞳で見てくる。
あまりに不快感が募つて視線を逸らす。

「お、照れてるのかい？」

「違う。んなわけあるかよ。それにしても、何だよ？」

お前違うクラスじゃないか。しかも俺に話があるのか？」

「んー、あるといえばある。無いと言えば無い、ってところだね。君がわつきの僕の言葉に違和感を覚えたかどうかで、これから的话は変わるんだよ」

赤石は、そう言つて口笛を吹きだした。

よく知らないが最近流行りのCMの曲っぽい感じがする。
無駄に上手いからそれをBGMに赤石の言葉を脳内で反^{はん}射^{すう}した。

『おつはよー』『ぞこます？ 富本くん』
『んー、挨拶でさえ返してくれないのかい？ 富本くん』
『他のクラスから君のためにわざわざ来てあげた同級生に一言もく
れてやらないなんて、冷たい男だね富本くん』
『ほりほり、挨拶挨拶！！ 友好な関係を築くのはまず挨拶からつ
てね』

違和感、発見。

「……おはよー」^{ハヤ}ります？」

「違ひつー。つーか挨拶は確かにしてなかつたけどー。」

「嘘。冗談。今のはただの朝の義務的な挨拶だ。……友好的な関係を築く、つてところだろ？」

「セーかいー」

俺が言おうとした事を牽制するよひに右手がすつと上げられた。その手に田を向けている間に赤石は、左手をポケットに突っ込んで、小さな袋に包まれた赤い飴玉を出した。

無言でそれを俺の方に投げ渡し、正解賞品でーす、と囁ひでペースしててきた。

「おいしその飴。僕の一押し。ちなみに味は梅干。すっぱいよー

ー

「渋いな、お前」

「渋いよ

少し文句を言いつつもその飴を口の中に放り込む。梅干の独特なすっぱさと、少しの甘さが口の中に広がった。

ପାତା ୧୫୩

ガリツ

口の中で餡玉を転がしながら、俺は友達なんていられーぞ。と言つた。

反抗期なんてカッコよくないんだよ？

強がるのは、もう飽きたし。

心の内でもほそつと呴いてみた。

おお、今巷で大流行のシンデレだ、とか赤石が楽しそうに言う。

「ふむ、まあとにかく友人は必要としてない。ということだね？いやはや僕としては友達になつてほし」ところなんだけれど、君が拒絕するなら仕方ないね。

「殘念、至極殘念」

腕を組み非常に残念がつな顔をしながら赤石はペリペリ喋り続
ける。

「つたい、びひやつたらドリサで話のネタが Became いじなへ話す
「」どがでれるのか、教えてほしこ程だ。

「ちゅうと待てー」

今度は俺の番だ、とでも言わんばかりに右手を上に上げる。赤
石の言葉がぴたつ、と止んだ。

餃を舐め終わってもなおすっぱい味のある口の中の息をふー、と
吐き出して話し始める。

「友達になりたいって、びひこひことだよ?」

「そのままの意味故に僕から話すことかなこよ。

強いて言えば、畠本くんといれば面白ことしがあるー。と直感で
わわぴーん、ときたからだよ。

あの感覚は初恋にも似ていた気がするね。好きですー。」

「せりやじゅも」

そんなことはびひでもここんだよ。

へらへらと笑つてこる赤石を睨みつけね、むかつと戻れた。
可憐くね。

「それで? そんなびひかで聞いたセリフ代用して俺の事、心の中
で笑つてんじやねえの?」

「じゅせ、なんとも思つていないとんだらつなあ。

「まっさかー」

どこかぬけたような声で答える赤石を見やつつ壁に掛かっている時計を、横目でチラッと見る。

もうすぐクラスメイトが登校して来る時間になっていた。

そろそろ居心地の悪い時間帯が来ると思うと吐き気がする。お腹の辺りが重くなり、ぞわっと腕に鳥肌の立つ感覚がした。

「笑つてはいんだけれどね……。それじゃあこつしよつ。

僕が今日中に君の何の役にも立たなければ、友達になるのは諦めるよ。

その代わり！

一回でも役に立てば無理にでも友達になつてしまつよ。君が何と言おうとね

「……なんだそれ。そんな賭け事みたいなのを俺が受ける必要性とか、メリットが欠片かけらもないじゃないか」

「たしかにそれはあまりないだろうけれどね、得る者は僕だよ。

友達友達。

そうすりや一人でもないし、周りから取り残されることもない」

先程、無理にでも友達になる、と言つていたから俺がその賭けを放棄しても、多分無理矢理引っ付いてくるんだろう。

昔から切り替えや踏ん切りが早いなど評されている俺は、諦めてその賭けを承諾じょうだくした。

単に諦めが早いとか根性が無いとかそこいら辺なのかもしねり。

承諾の言葉を赤石に伝えると、心底嬉しそうな顔をし机を蹴飛ばすような勢いで飛び降りてギリギリまで俺に近づいてくると、両手を掴んで勢いよく上下でぶんぶんと振った。

痛い痛い。

「ありがとう！」

「……本当に役に立つんだか」

「セレナはちやんとやらぬよ」

セレナは赤石は左手を軽く上に上げた。

かと思つと、その手には俺の愛用の青い筆箱が乗つっていた。

「ほい、早速忘れ物のお届けでーす」

「……マジ、かよ」

早々と赤石が役に立つてしまつた。

あつせつしそぎて、何の言葉も出ない。

あまりにも唐突で、やるせなさが俺を支配する。

俺の空いてる右手にぽんっと筆箱が乗せられた。

「ほいー、もひ。眞本くん友達いないんだから鉛筆なんて借りれないんでしょ？」

「気をつけなあや。足許掬われる……とは違つたれど、困るんでしちゃうが」

「……ありがとう」やれこました」

精一杯の皮肉を込めた言葉と、いつもと違つ低い声でお礼を云える。

「その俺の少しの声の違いにも気がついていないであろう赤石は、ハーハーハと笑っている。

してやられた、と思った。

赤石は魔術師だから、魔術を使って助けるのは目に見えていたが忘れ物を届ける、という形で役に立たれたのは意外だった。裏をかかれるところはこうしたことなのか。

「どうあれ、今日からようじへ友達

」そう言つて赤石が更に強く握った右手を俺は握り返した。

「よひじへ、お願ひします

赤石瀬七は不思議なやつだ。

人の事には躍起になつてでも干渉してきて、何もかも引つ搔き回していく。

それが迷惑とか嫌だとどいつもか聞かれるとさうでもないんだけれど、むしろ感謝することも多々ある。
でもあの性格はなんとかならないかと、田々惱む俺がいるわけだが。

それを抜きにしたとしても、瀬七はやけに俺に構つてくる。

そりや、お節介とかそういうわけじゃなくて気紛れなんだらうけれど友達になつたあの日から、高校一年生になつた今日まで友達でいられて親友になつたのは、互いに支え合つとかそういう青春臭いことをしてたせいだろう。

そういうことになくなくては、俺の気遣いの心が痛む。

そんなもの、無いけれど。

あまりに俺に構つ瀬七に対して、自分のことばかりでもこいのか?
? と聞くと

「はは。自分のことばかり思つてゐるかだつて? 一番好きに決まつてゐるじゃないか!」「

と言いやがつた。ナルシストかよ。

でもまあ、瀬七と俺の友情は不滅だぜ！ とか少年漫画臭いこと
を言つておく。

それで、場を治めようか。

「おや、おはよう宮本。今日もお一人様ですか。まったく、寂しい
奴だねえ。

同情なんて通り越して一 じおまつ 抹の哀れみさえ感じてしまつ

少しの気遣いを見せるこ こともなく、気持ち良い程の毒舌で瀬七が
朝の挨拶らしきものをしてきた。

……うん、泣きそ なうだ。耐えろ俺のメンタル。

瀬七の言葉通り、実際に俺は一人で自分の席に着いて漫画を読ん
でいた。

しかも、俺の席は教室の中でも一番後の一番窓際。校庭がよく
見える。いい天気で何よりだ。

そんな席にしかも一人でいるもんだから、とても孤独な奴に見え
るんだろう。

瀬七の席は対照的に一番前にあるが、そんなことを気にすること
なく自然に俺の前の席に着く。

「どうやら、高一になつても登校時刻の20分前に学校に来る癖は
治つてないみたいだね。

そんなに早く来ても暇だらう？ 特に用事があるわけじゃなかろ
う？」

それとも、あれ？ 一人で登校する様を見られたくねえ、とか？」

後ろを向いたまま、椅子の背もたれに前傾姿勢で、もたれ掛かる様な格好のままで話しかけてくる。

俺は漫画をパタンと閉じてドン、と瀬七の頭を漫画で小突いた。つるつさい。

「いたつ

「ふん。登校する時間なんてどうでもいいだろ。癖はなかなか治らないとか言うし」

「そんなこと言っちゃって。本当は友達が僕しかいないから一緒に登校する相手が」

瀬七の言葉を遮るよつこひーもつー回、ゴジンーと今度はより強く漫画を瀬七の頭に振り下ろした。

「いってえ！ とさつきより大き目に喚く瀬七を横田こ、また漫画を読み始めた。

これで、少しほのめかになつてくれたらいいものなんだがな。

「……ふー、いつたいなあ。飼い犬に手を噛まれると言つかなんと言つか……。」

ところが、ここで突然ですがお知らせがあります

「なんだよ」

漫画から顔を上げないまま瀬七の声に耳だけを傾ける。

「——でいんぐナウやつに声を掛けるな、といつ俺なりの反抗心の表れ。失礼だとは思うけど。」

早く続きを読みたいといつ考へで俺の頭の中はいつぱいで、ページをペラペラと捲り続ける。

しかしそんな少しの願いも叶わず、瀬七に両手で顔をグツ、と掴まれ漫画から顔を上げられる。

「聞いてください」

「はい」

渋々と話を聞く態勢をとると、実はなあ、と手を離しながら前置きをして、瀬七が話し始める。

「お前を好きといつ子がいるといつ情報を手に入れまして。
なんて言つの? あなた、色恋は久し振りでしょ?」

は?

「今はエイプリルフールじゃねえぞ」

四月は四月でも四月十八日。

「いやいや冗談ではないし僕がちゃんと調査して手に入れた情報だから！」
「いやかエイプリルフールならもっと凄いの吐くから！」

僕の嘘と冗談はこんな物じゃないから！ 来年は覚悟しな！

やめてくれ。どんな嘘と冗談だよ。

溜息を吐いて、少し考える。

……つまり、あれだろ。こういうのは
favoriteとかlikeとかloveとか、そういうこと

だろ？

favoriteは違うだろ？けど。お気に入りじゃないよ。

「知り合いはあまり欲しくないのですが」

「あーそういうえば富本は友達と知り合いは門前払い主義者だったね
え。いやいや、いい話だとは思うよ？」

特にこれといった特徴はないけど、どちらかと言えば可愛らしこ
子だし？ ちょっと性格に難有りだけど」

「性格に難の有る知り合いとか彼女は欲しくないのですが

「敬語止めてください」

むう、と頭の中でその俺を好きとか言つ人について考えてみる。

同じクラス？ 違うクラス？ 同学年？ 他学年？ 性格に難有りつてどんなだ？ etc.

俺を好きなんて、そういう話は久し振りすぎて少し考え込んでしまっていた。

そうしている間に時間はどうぞ過ぎていいく。

「おー、赤石そこは俺の席だぞけーー」

「んあー」めーん

いつの間にかもうすぐチャイムが鳴る時間になつていて、俺の前の席の主が帰ってきた。

楽しそうに間延びした声で瀬七をびーんと押して、俺には一警いちけいもくれずに席に着く。

いつものことだから瀬七はそれを見ても何も言わない。俺もなんとも思わない。悲しそうな表情はやめてくれ。

同情は、いらないから。

「じゃあ富本、考えといへ

「……おひ

軽く手を振つて自分の席に戻つていく。

手を下ろした後、漫画が下で潰れるのも気にせず俺は机に突つ伏す。

ぐしゃり、という音がした。

やっぱ、友達やうやう知つ合になんかこらねえ。

心から思つた。

赤の追撃

自慢ではないが、俺は勉強ができない。多分クラス中の周知の事実。

定期テストやらマークテストやら、それらのテストの順位は学年でも下から数えていったほうが断然早い。

ひーふーみーよーいつむーななやーここのつとおー。

そんな極端に下の方ではないけれども。

それでも授業中だけは眞面目に話を聞いてノートも取っている、つもり。

だから朝の内に何があろうと、本日も眞面目くん風に全ての授業を受け続けた。

あーねむい。

そして場面は放課後へと切り替わる。

「あいやー富本。片付けが終わったら屋上にカムカーム
「おーけーおーけー」

帰る用意のできた瀬七が氣だるそうに俺に声をかける。
そしてそのままフラフラと廊下に出て行つた。

その後姿を少し眺めつつ、俺ものんびりのんびりのらつらつと教科書を片付ける。

屋上とか面倒だな、何の話だろ?、やっぱあれ? 告白話?
考えることはたくさんあれど時間は限られているから人間つての

は不幸だね。

鞄を左手に廊下に出てすぐ傍にある、三階と四階を通りて屋上へと続く階段を上る。

俺も瀬七も、何の部活にも入っていないものだから、何ものにも咎められることなく階段をどんどん上り続ける。

俺の所属中の教室は一階にあるから屋上は遠い。

普段から運動だけはしているおかげか、しんどくも何事もなく屋上に入るための扉の前に辿り着く。

計94段、お疲れ様でした。

ガチャッとその扉を開けると同時にギィー……とこう音がする。古い扉特有のあの音。耳が痛い。

顔を上げ前方を見据えると瀬七の黒い髪が見えた。あと赤い髪。

ん？ 赤い髪？

「おや、富本。遅かったね。またのんべんべりつと付けてたのかい。まあいいけれど」

見慣れない髪色を見て呆然と立ちつくしている俺に、座っている瀬七が話しかける。

瀬七の「はは」と我に返ると、再び思考回路を起動させた。

屋上の床って汚くないか。

いや、さうじゃなくって。

よつこらせ、と瀬七がじじいよろしく立ち上がる。
赤い髪の女生徒も立ち上がった。

「ふむ、その呆然とした間抜け面を見たところ鎮西さんを知らない
ようだね。

紹介するよ。こちら鎮西和南香さん。ちんせい ななか名前くらいは聞いたことあ
るんでねえの？」

「いや……聞いたことない」

脳をフル回転させて記憶の倉庫を巡つても“鎮西和南香”という
名前は出てこない。

つまり、聞いたことは無いという事であつて、俺がどれだけ同学
年のやつを知らないんだ、という象徴にもなつた。

「おやまあ知らないとは。それで鎮西さん、こつちが富本龍紀ね
「初めまして、鎮西です」

その赤い髪の人物は鎮西和南香、という名前らしく一目見ただけ
で染めたんだ、と分かるような茶髪混じりの赤い髪と白い肌が対照
的で映えている。

その肌の色は一見すると、ヨーロッパとかその辺の白人にもとれ
る。

目付きは悪いらしく、俺の方をじろつと見つめてきた。

人によつては嫌われているかのよつに見える。かもしれない。

俺何もしてねえツス。

「こ」の人はあれですか。俺のことが好きとか言う人ですか

そう言つた途端、先程後ろ手に閉じていた扉にドン！ とぶつかつた。

唐突な出来事で何が起きているかは分からなかつたが、腹部に鈍い衝撃を感じる。

痛い、と一言だけ発しゆつくり体を起こした。そして瀬七と鎮西のいる方向に目をやる。

「……魔術使うなんて、卑怯じやないのか」
「高等魔術師ならそんなことお構いなしよ」

そう言つて不敵に口元だけを歪めて笑いつつ、しかし、相変わらず剣呑な目つきで俺を睨みながら鎮西がそう呟く。

俺を扉に吹き飛ばしたのは、やはり鎮西のようだった。

んー、魔術使うとは意外だ。多分さつきのは衝撃波だと思つ。あれ扱うのは難しいんだけどねえ。さすが高等魔術師。

過去の栄光を思い出さずんばここに光あれ。

自分でも何言つているんだろう。分からない。俺はまだ、高等魔術師だった頃を思い出しているのやう。

……ん？ 魔術？ 師？

「あ

その時、俺の脳に電流走る。

「の方、校内で超有名な高等魔術師さんじゃないか。

あー、思い出した。学年代表挨拶とかでよく見るね。うん、うん。成績優秀だけど友人少ない俺の類人やつほい。しかも同じクラスだった気がするよつな、しないよつな。人間つてのはよくわかんないねー。俺も人間だけど。いつも見かける顔より、田つき悪すぎの猫みたいだから気付かなかつた。

「あはは、どんとまいんど富本。君のこと好きなのは鎮西さんではないんだよ。

つーかこんな美人に好かれてるとか勘違いすんなバカヤローー」

「バカヤローー」

「何やまびこじりこしてんですかおー一人とも。

「それじゃあ誰が俺を……その、好きだといつんスか。……瀬七、ニヤニヤするな」

俺が一瞬好きとか言つのを躊躇つたせいか、瀬七がニヤニヤしながらこつちを見てくる。やめてくれ。

胡坐を搔いたまま一人を見上げると、鎮西は言いにくそうに渋りながら話し始めた。

「そのアンタを好きなのは、私の友達よ」

「へえ、その友達は誰で？」

「北上百合奈」

「へえ」

知らねえ。

そう言うと今度はつかつかと鎮西が自ら歩み寄ってきて、顔面をグ一で殴られた。

なんか口の中で血の味がします。あ、口の中切れた。

もの凄い笑顔で殴った鎮西は今、気持ち良さそうな笑顔で仁王立ちをしている。威圧感が半端ではない。

あー、でも例えば同じクラスだつたら失礼な事したな。
失敗、失敗。

「ビンタがよかつた？」
「聞くなら殴るなーー！」

「……っていうか、私と西口奈はあなたたちと同じクラスなんだけ
ど」

「へへ。マジで？ 嘘だと叫んでくれよ瀬七一。

そう思いながら縋る様な目で瀬七の方を見ると、腕を組んでうんうんと頷いている。

やっぱ本当だつたのかー悪い」としたかもねー。ああ、同じクラスだつたね、「メンとか一言謝つとナバよかつたかも。

「あーマジかーすんませんー。

そう呟きながら、鎮西の方に向き直つて軽くペコり、と頭を下げてみた。それでも鎮西は不満そうに眉間に皺を寄せている。

何が不満なんでしょうか、女王様。

そう呟つと今度は足の爪先、もとい靴の先で俺の膝小僧辺りを思いつきり蹴つてきた。

なんだろう、俺しし座だけど今日の十一星座占いで最上位だったんだろうか。

「今日の占い第十一位は、『めんなさい！ しし座のあなた。全ての事で空回り気味。余計な事をすると相手の怒りを買っちゃうかも？

お出かけ先では相手に対する言葉と態度に気をつけねー。」

みたいな感じで。ラッキーアイテムは何ですか。

「立ちなさい」

そんな「」を見るような目で睨みつけられると背筋がぞくぞくします。

なんてことはなく、先程の占いに従つて黙つたまま素直に立ち上がる。よつこいらせ。

つむ、先程鎮西にやられた腹と右足の膝小僧が痛い。

そして立ち上がり再び鎮西を見れば、彼女が案外小柄だということに気がついた。

俺の身長が170?位だから正に平均的。ちなみに瀬七は164?だから少し小さい。

そして鎮西は、おそらく160?くらいだ。

10?つて意外と差が大きい、と実感中。しかも鎮西さん細いから、余計小さく見える。

さつきは威圧感とかオーラのせいでなんか大きく見えたな。

「」で、ふと氣づく。

「質問よろしいですか」

「何よ」

「ホン、と一息吐いて質問する。

「なんで、初めましてとか言つたんだ？ セツキ自分で同じクラス
だつて言つただろ」

「あーそれねー。あんたがここに来る前に赤石とあつと打ち合わ
せしててね。

なんか、あんたつて人の名前とか殆ど覚えてないとかいうし？
ちょっとした実験みたいな感じで試してみたのよ、私たちの事覚
えてるかどうか。

ま、案の定まつたく覚えてないといつか、知らなかつたようだけ
どね。百合奈は学級委員長なのに。

それで、ちょっとムカついて殴つて蹴つて衝撃波ぶつ放した、つ
てわけ。分かつた？」

非常に（理不尽なことがとても）よく分かりました。
そういうことを伝えるため首を縦に一回振る。

もちろん、（）の中は伝えない。伝えたら次こそ殺される。
今度は満足したのか、鎮西は眉間に皺は寄せずに次の言葉を紡ぎ
だす。

「私が赤石に協力してもらつてあんたをここに呼び出した理由は、
もう分かつてるわよね」

「そりやね。その北上のことだろ？ でも付き合えとかお前に言わ
れても無理だ。そういうのは全部断る」

「そんなこと分かつてるわ。そこら辺の事は全て赤石に聞いてるか
ら。

あなたの趣味やら家族構成やら苦手な事とか過去話とか、ゼーん
ぶね。個人情報保護法なんて、知つたこつちやないわ」

「プライバシーの侵害だ！！」

ビツと人差し指を鎮西のほうに突き出す。それを顔を横に逸らすことで難なく避け、そしてそのままブイツと横を向く。

その指を右奥にいる瀬七に「お前もだ！」と言いながらまた指を突き出すと、へらへらと右手を振つてくれる。

「「」めーん面本。いや、もう炎とか田の前に出されながら脅迫なん
かされたらち、答えるしかないじやん」

「…………いや、そうかもしないけどさ。けどなー、そんな状況
でも言つて良い事と言つたら駄目な事があるだろ！…」

溜息を一つ吐いてから再び鎮西の方に向き直る。

まあ、確かに炎は怖いよな…………うん。かくいう俺も炎引き提げて
脅迫まが紛まがいの事をされた事がある。

……つか、あれやつてきたの瀬七じゃん。もつもつと頑張つたら
魔法法律裁判所で訴えれるんじやね？

「話は終わつた？」

「いや、ややこしくしたのはお前の発言だからな、絶対」

「そんなことはどうでもいいわ。わたくしの話の続きを。

それでね、初めっから彼氏になれとか無理強いするつもりは毛頭もないわ」

「それなら俺にどうしようと」

頭上に回り続ける疑問符を浮かべながら鎮西に質問する。
彼氏にさせるつもりはない=関わらなくていい、つてことじやないのか。

俺に何をさせるつもりかは知らんがとらあえず反抗心だけ見せといふ。

「うん……、と鎮西に軽く唸つてみると軽く無視された。

ついでに、更に冷たい目で見られる。

「だから、あんたには百合奈の友達になつてもうおつと思つたの」「お断りします」

ジユワッ

そう言つた瞬間、何かが燃えたような気がした。

次は何だと思いながら全身を見てみると、俺の髪の襟足の部分が
左側だけ襟足の生え際まで燃え尽きていた。

『一寧にも直線が入つてゐるみたいに綺麗な焼け目である。

取り敢えず、皆さんそれがどうしたとか思うので、俺の髪の毛講座開講。

俺の髪の毛は男にしては長い。いわゆるロン毛、とか言ひやつ。それが肩の辺りまで伸びてるもんだから長いもんだ。女子かつていう。

加えて金髪だから、見ようによつてはヤンキーとか悪い人に見えるかも知れない。

そんなこと全くないっスよ。その髪の毛が左側の襟足だけ燃え尽きました。

だから俺の右側だけ隠せば横髪の長いショートカットの男。左側だけ隠せば髪の長いロン毛男とかそんな髪状況になる。まあつまり、とてもカッコ悪い状況になつてているのだ。

以上！！

「うつわ、富本カツコ悪い」

「そんなこと言われんでもわかつとるわい！」

瀬七に蔑むように笑われ、怒鳴りつける。

次に鎮西に向かつてギロッと睨み付けてみると、またそっぽを向いていた。

よく見ると肩がフルフルと震えている。瞬間、クスクスと笑い始めた。

「うつわ、ブブッ……カツコ悪い」

「ほんともう鎮西さん笑わないでください！ といふか原因またあ

なたあああああああーー！」

精一杯の怒りをぶつけても鎮西は尚、笑い続けていた。瀬七も然り。

しかも腹を抱えて大笑いしてゐるもんだから鎮西よりも性質が悪い。まあ、当然殴るよね。というわけで全速力で瀬七に走つて近づき、頭を一発殴る。

なんか最近瀬七殴つてばかりだなあ、とか思いつつ更に足の脛すねを軽く蹴つてやつた。

「つぬおー、ぐげつ」

奇声を上げながら瀬七が蹲ひざくまる。やり過ぎたか。

見上げてみると当然のことながら空が広がつていて。トンボの眼鏡がオレンジ眼鏡になるような夕焼け空が広がつていた。

明日は晴れだね、多分。

「これで懲こりたか瀬七。鎮西、さつきの話の続きー」「ツブ……分かつた、分かつた」

え？ 何で鎮西に怒らないかつて？

そりや暴力とか怒声上げたら次はどこを燃やされるか分かつたもんじやないからね。無難に生きよう。今日は運が悪いんだ。

一頻り楽しそうに笑つた後、鎮西はこっちまで歩いてきた。

「まだ友達になるのはお断りする？」

「そりやまあ。ていうか友達になる理由を教えてくれ

「そつか、そこから説明しないと納得しないわよね、この犬は」
犬じゃないっス。せめて一足歩行型の哺乳類でお願いします。
まあ、詰まるところの人間でお願い、という事だが。
そんな事を言つても無駄だと思い、取り敢えず話を聞くことにした。

例外が好

「まず、百合奈はあんたが好きとかいうか、気になつております」

「ほう

「気になつてゐる、とこつ程度である時点での、好きとかそういう話ではない気がする。

女子つてのは分からんが、気になつたら夜も眠れないもんだとは聞いたことがある。

それは好き、つてことで解釈はいいと思つが。

「それで、私がその事に気づいたことを、百合奈はおもらく知らないと思う。そこでね。

友達の機転を利かせてやつて、その恋を成就させてやつひとつ友達の思いやりが、今回の呼び出しに繋がつてゐる。

ただ、そこで問題点が発生するわ。

何しろ私と百合奈は、あんたと一切の接点がないから、その考えがそれ以降発展しないということに気づいたの

「クラスメイトなんだから普通に話しかけりやいいんじやなかつたのか？」

鎮西はそこで首を横に振つて否定する。

「それがね、百合奈の恋心に私が気づいたのは昨日今日の話じやない。学年の上がるそれ以前、半年前からだつた。

百合奈が、あんたの事を何時から好きだつたのかは、私の知る所じやないけど多分、何年も前から好きだつたんじやないかしらね」

片思いつてのは長ければ長いほどその恋焦がれる気持ちが強まるらしい。北上も、例外ではなかつたんだるつ、當時は親友とは言えない程度に仲の良かつた鎮西です、何となく氣づいたと。う。

恋愛事に関してはワクワクするのは鎮西もらじく、北上の恋がすんなり叶うように少し前から北上にはばれないよう、こそこそと準備していたらしい。

そこだけ聞いたらただの友達思いか、ただのお節介のように聞こえる。

でもいいやつなんだろう。しかし鎮西は大きく溜息を吐いた。

「けどまあ、百合奈つたら當時から何時まで経つても、告白する様子が見られなくてねー。それで、数ヶ月前にちょっとした実行に移つたの」

その実行とやらが、俺と唯一親しい瀬七に干渉することだった。らしこ。

「何でも、俺の情報を確実に手に入れるため先程瀬七が言つていたよつに、齎迫紛まがいの事をして親しくなつたとか。

俺としては迷惑極まりないが、鎮西としては必死だつたそつだ。齎迫紛いの事をされても仲良くなれるとは。瀬七の懐の深さというか、腹の黒さで息が合つたんだるつ。

それはさておき、美しい友情だと感心した。

それから色々とやつてゐる内に細かいことが面倒くさくなり、今回のような実行に移つたらしい。

「飽きつぽいんだな」

「だつて何やつても実にならないのよー? じれつたいつたらありやしないわよ」

半年なんて長い長いーー、と言しながら手を横に振る。しかし、やつぱり鎮西の行動に違和感を覚えた。

「ナゾや、そんなこと俺に伝えてどうすんだよ。そんな事言われても、逆に強く拒絶することしかできねえ」

「ああ、その」と私も思ったわ。でもね、そこを利用するの

「つまりね、友達になつてもらつて百合奈の良い部分見せ付けて、あんたに百合奈を好きになつてもらおうといつこいつ魂胆よ」

「自分で魂胆とか言つたよこの人」

「事実だわ。そんなの偽つても仕方がない」

「そんな無理矢理なラブコメ的展開なんか聞いたことねえよ」

大体こいつのは、鎮西が俺に何も知らせないまま友達になつて、そこから北上と自然にくつつけさせる。とか、そんな展開なら理解できる。

もう一回言つが、ビリでも聞いたことねえよこんな展開。

「あんたが想像したような、じれつたい何時成就できるか分からない行動よりもこっちの方が成果もちゃんと目に見えるし、地に足が付いた感じでいいじゃない」

「俺の考えが見透かされている、だと……！？」

ゆつくりと太極拳の構えをとつて、カツと鎮西に言い放つ。また冷たい絶対零度の視線を頂戴するか思いきや、今度は、蔑むような視線を頂戴し、ハンツと鼻で笑われた。

取り敢えず姿勢を元に戻し、土下座しながらすいませんでした、と謝る。

「何で土下座するの。みつともないわ、富本」

「おおつ、名前呼んだ」

「やこかよ、おー」

出会つてから初めて名前を呼ばれ、驚いて顔を上げると若干引いている鎮西の顔があつた。

さつきから空氣状態だつた瀬七が何時の間にか俺の後ろにしゃがんでいて、短くなつていない右側の髪をちょろちょろと弄つていて。

「まあ、そんなわけで明日からよろしくね」「一人とも。ご協力お願ひするわ。拒否しても魔術で従わせるせることだつてできるんだから。そんな面倒なことされる前に自主的によろしくね」

そう言つて手を振りながら魔術で扉をガン！ と開けて屋上から出て行く。

理不尽なことばつか言つやつだなー、とは思つていたがここまでとは思つていなかつた。

人権とかガン無視だ。人権？ 個個人の尊重？ 尊い一人一人の権利？ ハ？ 何スか、それ。そんな感じだ。

「……なあ瀬七、どうするよ」

まだ髪を弄つている瀬七に話しかける。

「そうだねえ……」

手を止めて瀬七が立ち上がつた。

「取り敢えず、髪を切ろうか」

そうだな、と言つて俺も立ち上がる。制服に付いている土埃を掃い、開け放しになつてているドアに向かつて歩き出した。

今朝は休日だと叫ぶのに6時30分に目が覚めた。

いつもなら、平日でも7時30分に目が覚めて慌てて学校に行く、
といつ毎日毎日飽きないドタバタ劇を自分にだけ披露しているとい
うのに

休日になつてこの早起きとこう快挙つぱり。誰か賞状してくれな
いものか。

がんばったで賞、みたいな感じで。

いや、もうありえないさーとか言いながら、今日は何があったの
かと思いベッドの傍にある小さな台の上に置いてある
月巻り式の小さいカレンダーを掴んで、じーっと睨みつけよう
に今日の日付を探す。

しかし、そこで今日が何日かを知らないのに気づき、のつそりと
ベッドから這い出してベッドの前に配置されている、勉強机の上に
ある水色の携帯電話をまたぐわし、と右手で掴む。

そして横にあるボタンを押して今日の日付を確認すした。

携帯電話の光が、寝起きのあたしの目には眩しいけれど極度の近
眼のせいによく見えないから、それでも顔に近づけてよく見てみる。

「おー、しがつはつかーどよーび……」

そう呟いて携帯電話を掴んだままベッドに向かってダイブする。

ベッドのスプリングがギイギイしているけれど、あたしは何処でも寝れるから寝心地が悪くても問題ない。むしろ快適になってるかも。

しかしつつ伏せになるより、ダイブしたので、鼻を打ったのかやけに鼻が痛い。

ちきしょー……と言しながら、左手をゆきく伸ばしてまたカレンダーを掴む。

左に顔を向けて二十日を探してみると、そこには青い螢光ペンで“AM7:00 補習”と書いてあった。

「あ、やっぱ」

そこで完璧に日が覚めて、今度は急いでベッドから跳ね起きた。まだ痛む鼻を押さえながらカレンダーだけをベッドに放り投げて一階にある洗面所に向かって猛ダッシュする。

慌しい、朝。

「取り敢えず顔洗つて着替えて準備して……のわっぶ、へ

ぶつぶつ予定を呴きながら階段をタンタンタン、と駆け下りて
ると
足を滑らせて、ずででででと変な格好のまま階段を滑り降りてし
まつた。

「……つつ……う……」

頭を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

肘のあのぶつけたら痛い所も思いきりぶつけてしまつたようだ。
それも押さえつつふらふらしながら洗面所に向かい、取り敢えず
顔を冷水でバシャバシャと水を辺りに飛び散らしながら洗つ。

そのあと一DAYのコンタクトを慎重に、そつと人指し指で目に
入れた。

今日はすんなりと目に痛みもなく入つたみたいで、なんだか嬉し
い。

朝からぼやけていた視界が鮮明になり、気分がすつきりとする。

肩より少し下まである金色の髪をゆっくりと櫛で梳かし、黒い髪
ゴムで一つに結う。

そして両耳には水色のピアスを一つづつ付けた。
ピアスは付けていても校則違反にならないので、本当にありがた
い。

装飾品の一つでも身に付いていないと、なんだか落ち着かない。

余談かもしれないけれど、あたしの髪は、金色一色ではない。頭頂部の髪の色だけ、こげ茶色に染まっているのだ。まあ、そんなプリンみたいな色層にしたのは、趣味なので、了承を！

また階段を駆け上がり、クローゼットのある部屋に行き制服を引っ張り出す。

あたしの通う学校は、男女とも冬夏通して似たような制服で、冬服は白ブラウスに濃紺のブレザーもしくは各自で好きな色のセーター。

指定セーターが無いので楽。そして女子は黒い布地に白いラインが一つあるスカート。

男子は上は女子のそれに黒いズボンの組み合わせ。リボンとネクタイはどちらも赤色で、靴下は黒。こんな感じの一般的な制服。

中学正の時のセーラー服よりは可愛いくからマシかな？ と思つ。

夏服はブレザーが無くなつてブラウスが半袖になつただけ。もしくは、ベストとか自由に着てもいい。

リボンとネクタイは基本付けるけれど、付けなくて怒られないからあたしは付けていない。

本当に自由な制服スタイル。どうせなら私服してくれつて思う。けど制服じゃなくなつたら何年ですかアナター、みたいな感じになるよねー。

それはそれで面白いと思つた。

そういっていの内に制服に着替え終わった。

部屋に戻つて通学鞄に必要な物だけを放り込む。

現在時刻 A M 6:47。携帯電話も鞄に放り込んで、準備完了。本当に急げばこんなに早く準備ができると知つて、感心。

滑り落ちないように階段を急いで降りて、鍵を持って玄関に向かう。

一軒家のわりに靴は一、三足しかない玄関で指定のローファーを履いて立ち上がる。

家を出る際に「いってきます」と言った。

あたしの他に、この家にはもう誰もいないことこの上ない。

こんな事を言つと親が死んで一人暮らしをしてる学生っぽいけれど、実際、そうではなかつたりする。嘘吐いてごめんね？

親、現在進行形で生きてます。超若い。バリバリ。

あたし、一条萌はあの家族にとつて所謂、いらない存在だった。育児放棄とか虐待とか、そういう物は無かつたけれど子供の勘つてのは鋭いらしくなんとなく気がいた。

ああ、この子産まなきやよかつた、つていう両親のあたしを煙たがるような視線に。

気づけば両親はこの小さな一階建ての一軒家を建てて、あたしに生活させていた。

やだねえお金持ちは。何でもかんでもマネーで解決させようとするんだから。

初めこそ悲しかつたけれど、この生活も五年目。もう慣れてしまつた。

料理は未だに下手だけどこの時代には、コンビニエンスストアという名の文明発達の証し的な物がそこにあるから特に困っていない。

生活資金も定期的に送られてくるから、結構自由な生活っぷり。自由だー、イエー！ みたいな感じで取り敢えず叫んでいた。

「イエー」

そう言つて鍵を閉める。『飯を食べてないからお腹が空いて死にそうだけど、わき田も振らずに道路を駆け出す。

『近所さんとかまだ誰も出てきていなければ、車は相変わらず走つてゐるから邪魔にならないよう端の歩道を全速力で駆ける。

運動はできるけれど一kmを全速力で走るのは大変で、途中で息切れした。

それからは歩いて学校に向かつ。

学校の正門に到着した時、7時のチャイムが鳴り響き慌てて再び駆け出した。

校内にあまり人がいないのを不審に思いながら二階まで駆け上がる。

痛む脇腹を押さえながら教室の戸をガラッと、思いつきり開けた。勢い余つて戸が横に思いつきりぶつかって、バーン！ と音が鳴る。

その瞬間、教室にいるクラスメイトが全員一いつちを向いた。

「あれ？」

教室の中には、まだ二、三人くらいの女子しかいなかつた。

教室前方の壁に掛かっている時計を見ると、現在時刻AM7:06。

とつぐに補習が始まつてゐるはずの時間。
けれど、教室にいるのは一、二人。

彼女たちに視線を向けると、皆不審な目をしてこっちを見ていた。全員、真面目な子ばかりであたしと親しい子は一人もいない。普段不真面目とか、そう評されているあたしが息切れして急いで入つて来たから変な目で見られているんだろうけど、とても居心地が悪い。

見んじゃねーよー、という意味を持たせた視線で彼女たちを見ればさつと視線を逸らされる。
なんだこの子ら。

「ももちやーん……」 がばつ
「どあつふ」

後ろから何者かに思いつきり抱きつかれ、思わずつんのめる。

「ちょっと、琴音……痛い……」
「あ、ごめーん」

抱きついてきた人物、友達の黒崎琴音くろさき ことねがパツと離れた。
えへへー、と笑いながらあたしの前に回りこみ、また抱きついてくる。

琴音は身長が低く、それに対してもあたしはそこそこ高いので彼女の腕があたしの胸の下に回りつく感じになる。
キラキラ目を輝かしてあたしを見上げてきた。
琴音の眩しさに、少し目を細める。

「おはよー、ももちやん」
「うん、おはよ琴音。今日はえらく機嫌がいいねー」
「あ、わかるー？ 朝からももちゃん見つけたから嬉しくつてー」

ももちゅん、といつのまあたしのあだなだ。
どうやら琴音はあだ名をつけるのが好きらしく、何にでもあだ名
を付ける。

物にも名前を付けていて、この前は愛用の携帯電話をべてこちゅ
ん、と呼んでいた。

少し子供っぽい所がある、あたしの大変な友達。

うへへ、と琴音が変な笑い声を上げた。

そんな琴音をさながら相撲のよににしつつ自分の席に向かう。

「ねねね、何で今日ももちやん早いの？ なんでなんでなんで？」
「ちょっと落しつゝつかー、琴音」

「へい待ちなガールー、とふざけ合ひながらあたしの席に辿り着いた。

そして、琴音を引っぺがして自分の席に座る。琴音も自身の席に着く。

琴音は後ろの席だからあたしが後ろに振り向いて話しあす。

「何でももちやん今日早いのー？」

「早起きしたから以外に他ならぬのよー、琴音。

それより、今日の補習つて7時からじゃなかつたの？」

「えー違つよー早すぎるじやん。今日は7時45分からだよ

なるほど、カレンダーに書いた予定を間違つていたらしい。

いつもは普段の学校と同じ8時55分からだけど今日は、教師の集まりがうんたらかんたらで

時間が変わる、と担任が先週言つていたことを思い出す。

早いつて、7時45分は。

それより何であたしは書き間違えたんだー。心の中で絶賛後悔中。朝の慌てつぱりが記憶のDVDに録画されていて頭の中で再生されている。

正しく書いとけば30分後に出ても問題なかつたのに。

「今日早いのはねー、早起きもあるけど時間を覚え間違えてたの

「そ・なんだー、ももちゃんあわてんぱつさんだねえ。

琴音もね、今日は早起きしちやつて予定より早い電車で来たの。いつもと違う時間だから困っちゃうよねー

「そーねー」

語尾をゆるゆる延ばしてのんびり会話する。

いつももう少し早く来たら、こんな風に会話できるかなー、とか思い普段の起床時間を改善しようと提案中。

どうせ改善されないだろうけど。

琴音は電車通で、隣の市からこの学校に通っている。だから、琴音とはこの学校に通い始めてから友達になった。今ではすっかり仲良しになつていて、親友の内の人になつている。

「愛してるよー、琴音ー」

「えー、ほんとにー？ ありがとー」

こんな風に冗談を言つても可愛く返してくれるから、可愛いかぎり。

多分琴音は、今が可愛い盛りだと思つ。

「ココー」といつも笑つていて、大きくてつぶらな瞳をいつもパチパチと瞬かせている。

琴音の亞麻色で長い髪は、本当に綺麗。下ろしているため風が吹くとサラサラと揺れる長い髪は、透き通つて見えて、本当に綺麗。こんなにも綺麗で、しかも染めていないなんて。黒髪からプリン色層に染めたあたしとは大違ひだ。

腰まで届くその長い髪は、染めたせいで所々痛んでいるあたしの髪とは大違ひで、少しも痛んでいない。

そのおかげで、普通の茶髪の子よりも二割り増しで綺麗に見える

といつ、なんてお得な補正。

黒髪が嫌だから染めただけなのに、なんというあたしの髪の汚さ。

「あれ、今日のももちゃんすっぴんぴんだね。マスカラもしていないよー」

「ああ……急いで来ちゃったから、ご飯も食べてないしメイクもしてないねー」

「ふふーでも可愛いー。すっぴんももちゃん久し振りだけどメイクなんかしなくたって、十分美人だよね。うらやまーしー」

そう言つて琴音があたしの顔をじっと見つめる。

琴音や皆はあたしの顔を超可愛いー、だとか美人ーとか言つけど、あたしはこの顔が超可愛いとは思わない。

そりやまあ、人並み以上にはモテたり告白されるけど、性格で言えば琴音の方が良くて

顔なら一年生で一番美人とか言われている赤い髪の子の方が、絶対良いと思つていて。少なくともあたしよりは。

まあそんな顔だから告白されるのにも飽きて、去年彼氏を作つたからそんなに玉砕確定の告白をされることも少なくなつた。

はつきり言つてとても迷惑で、不快度指数は120%越えだつた。顔が良いからつて言い寄つてくるような人に、あたしは興味がない。

今の彼がどうなのか、と言わると恥ずかしいから以下略。

「ももちゃんはねー、三年生、いつこの学校でいつちばん可愛いの！」

でもメイクしたらもつと可愛いのー、といつわけで、この琴音がももちゃんに

琴音流メイクをお顔にほどこしてあげましょー」

「いや、あなた今メイク道具持つてないじゃない。どうせいつかするのよ」

「それは……魔術……。それー！」

それー、と琴音が言ひつと同時に掌をあたしの顔の前に開いて横にさっと振る。

その時、なんだか暖かい風が吹いた。手を下ろした琴音が鞄を開きピンクの置き鏡を取り出して、あたしの前の机に置く。

「いかがでしょーか

「おー、新鮮だね。ありがと」

「どういたしましてー」

そこにはナチュラルだけれど、しっかりとメイクされたあたしの顔があった。

そのメイクは、あたしがしたことないものだから仕方はよく分からぬけれど、なんだか気に入った。

後でこのメイクの仕方を教えてもらおう。と心に誓う。

「うふふー、かーわーいーいー。ぬ、あやや来たよーももちゃん」

そう言つて、後ろの扉から教室に入つてきた友達の高坂あやに向かつて、琴音が右手を大きく上に上げてぶんぶんと振る。

あやも苦笑いしながら近手を小さく上げた

「……」
あやせと一いの辻あやのあたなた

……何処かで聞いたことある とかいこのなしの方向でよNしへ

遅いー、と琴音が言いながら今度はあやに抱きつきに行つた。

抱かれて

そんな抱きつき魔・琴音の頭を撫でながらあやがいつちに近づい

てきた。

「お母さん」条。今田は卑いんだな」「あ・ね。珍しいでしょ」

そうだな、とあやが言ってあたしと同じ様に琴音を引っぺがして席に座らせる。

あやは少々男勝りな性格で、だなとか～だろ、みたいな男らしい口調で喋る。

肩甲骨辺りまで伸びた黒い髪をボーリングにしてる。正に田本人一、みたいな見た目。

だけど口調は男らしいから、少しだけミスマッチ。

身長も170cmと、女子にしては長身でカッコいい。身長分け

てください。

「琴音と一緒に来たんじゃなかつたの？ いつも一緒に登校してゐらしいけど」

「いや、一緒に登校はしたんだが生徒会室に用事があつて、少し寄つてきたんだ」

「琴音は待とうと思つたのに先に行け、つて言われちゃつたのー」

琴音がぶーっと拗ねてあやがすまん、と宥めるいつもの光景。
そこであたしは干渉せずに一人をにこやかに眺める。

これがあたしたちの会話の光景。いつも三人で行動しているからあたしたちを見かけたら、大体この光景が見られると思いますです。生徒会室に用事、というのはあやは凄い事に生徒会の副会長だから、多分生徒会室に忘れ物とか、生徒会長に用事とかあつたんだと思ひ。

突然お腹がくう、となつた。

途端に顔が熱くなり、まだ目の前に置いてある鏡を見てみるとほんのりと頬が赤くなつていた。これは恥ずかしさの赤。

一人に気づかれていいかと様子を見てみると、まだキャッキャツと話していく少しだけ安心する。

脇腹を強く押すとお腹が鳴らない、と聞いたことがあるから隠れるようにこそそそと、ぎゅーっと親指で脇腹を押してみる。

それでもお腹が膨れるわけもなくて、恥ずかしながら何か持つていなか二人に尋ねてみることにした。

腹が減つては戦ができぬ、とはこの事ですか。違うだろ？けど。

「だからね！ あややはいつも琴音に冷たいのーー！」

「そんなことないぞ。いつも甘やかしてあげてるじゃないか」「琴音、甘やかされてないもん子供じゃないもん！」

「いや、話しかけようと思つたんだけじゃ、更にヒートアップしてるんです。」

琴音がキーッと叫び、あやに噛み付く。食つてかかる、という意味で。

「この二人、幼馴染らしきけど本当に仲が良いのか怪しくなつてきた。

傍から、といふかあたしから見たらお母さんと子供が喧嘩しているみたいに見えて、少し面白い。

「はい、ストップ！」

そんな二人を仲裁するのもあたしの役目。琴音の小さな後ろ頭を軽くチョップする。

「琴音、言はずぎだよ」

「ももちゃんはあややの味方なのー……」

「そうじゃない。眞で仲良くなつたら、そういうだけだよ。はい、

仲直り」

「むー……」めんねーあややー」

「うつむかひこや、すまないな」

琴音がしょぼんとした雰囲気のまま頭を下げて、あやがその頭をまた撫でる。

「うへへー、と琴音がまた変な笑い声を上げた。けど、その顔は幸せそう。

やつぱつあやの言つ通り、琴音は甘やかされていた。

「そういえば、電車に乗る前にコンビニに入ってきたんだが少しパンを買いました。一人とも食べないか？」

あやがそう言つてバッグから六個パンを取り出して、琴音の机の上に並べる。

気になるランチナップは、気軽に食べられる、と今流行のランチパックが三つに、アップルパイが一つにメロンパンが一つだった。あたしから何かない？ と聞くとしたのに向ひから出てくるとは。

まさに、棚からぼた餅という感じ。よく食べるあやに感謝。ちなみにあたしは少食。

「自分が食べる分だけ買えばよかつたのに」

そう言いながらも心の中では嬉しくて仕方がない。これちようだい、と言しながらランチパックのNew!と書いてあるシールを貼つて居るやつを指差す。ん、と言ひながらあやがあたしの方にポンッと投げてくれた。

よく見ると何とかミルクと書いてあって、とても甘い。袋をバリッと開けて一口食べてみると、案の定甘かった。というか甘すぎる。

少し吐きそうになりながら、黙々と食べ続けた。

「ん～あまあまー」

あたしと同じパンを食べている琴音が、幸せそうな顔でパンを頬張っている。

あやはアップルパイを食べながら、ぞろぞろとやって来るクラスメイトに欲しがられるパンを投げながら、投げ返してくれるお菓子を鞄に入れていた。

教室内でお菓子が飛び交っている、という非常にありそうでない光景。

これをショールって言うのかな。

あつという間にパンは完売。

あたしも食べ終わつたパンの袋を辯が出ないよう、丁寧に折り畳んで鞄の中に入れる。

口の中に残つてゐる嫌な感じに粘つこい味を、琴音が飲んでいたお茶を貰つて口直しをする。

うえー、気持ち悪かつた。今度からミルクのパンはお断り。

その後もだらだら雑談していたらチャイムが鳴つて、教師が入つてきたり。

さあ、面倒くさい学校の始まり始まりー。

補習なんて関係なくて、あたしの頭の中は帰つたら何かをするかでいっぱいだ。

髪の毛を切つたら失恋した証。

そう考えるのは漫画の読みすぎとか、メルヘンチックな乙女なんだろうけど。

じゃあ、男の場合はどうなんだらう。女子のように肩まであった髪の毛をぱつぱつと切つて、うなじが見え隠れするような髪をこなつた。

「切りすぎじゃね？」

「そうでもないよ」

俺たちはあれから一旦教室に戻り、運良く鍵のかかっていない教室の中で髪を切つていた。

というか、俺が瀬七に髪を切られている。

理由は単純明快。鎮西に奇妙な髪型にさせられたから。

あれから帰ろうとはしたけれど、この髪型のまま帰つて道行く人に注目されるのは嫌だ、というわけで髪を切り慣れている瀬七にちまちまと髪を切り揃えてもらつてこるのだ。

なぜ髪を切り慣れているか、とすると俺は知らないわけだけどペチャくちゃと楽しそうに話しながらジャキンジャキン、シャキンシャキンと切つている。

そのぶんにはああ、慣れているんだなど納得。

耳元で鋏が髪を切つたり空気を切つたりする音が聞こえる。

それが交互に聞こえるもんだからなんだか眠くなつてくる。

眠気を吹き飛ばすのみで頭を軽く振ると、せや、と瀬七が言つて頭を抑えてきた。

「動くなよー宮本」「おーごめん」

乾いた笑い声を一つ上げ、少しだけ姿勢を正して前を見据える。普通に俺の席に座つてゐるから、前方には本とか置いてある棚があるわけで、右斜め前にはでかい黒板が、でーんと構えている。田線だけを下に向けると俺の髪の毛が少し散らばつていて、左にある窓から差し込む夕日でキラキラと少しだけ光つていた。地毛だからねー、綺麗だねー。

* * * * *

「よし、終わったよー」

ポン、と背中を叩かれてハツとした。

あれから何時の間にか眠つてしまつたみたいで、時計の長針が3から5に移動している。

床下にある俺の髪の毛もせつときより量が増えていて、時間が経つていることを証明していた。

「気に入らない部分があるかもしないから、鏡見てきな

瀬七が俺の肩にかけていたタオルを除けて、首筋を払ってくれる。言われるがままに廊下へ出て行き、水道にある鏡の前に立つ。

鏡を覗き込んでみると、いつもと何か違う俺の顔があった。

「髪が短いから当然か」

自分でノリツツコミ、自問自答をして顔を横に向けたりして全体的にどう変わったか見てみる。

肩まであった髪の毛が一気に短くなつたから違和感が満載で、恥ずかしい。

でも何を間違つたのか、以前はセミロング風の女子みたいな髪型だつたのに、今はショートカットの女子みたいな髪型になつていてる。

頭をわしわしと搔いて少しだけぼさぼさにしてみる。

でもサラサラとした髪質のせいで、少し撫でたらすぐに元に戻つてしまつた。

髪形を少しだけ変えるのを諦めて、瀬七の待つ教室に戻る。

「気にいつたかい？」

「じょーじょー」

教室に戻ると瀬七が床に散らばっている髪を箒で掃き集めていた。それに習えとばかりに掃除用具箱からちつとりを出して、髪の毛が集まるのを待つ。

新聞敷けばよかつたなー、と思いながら、ここには新聞が無いのでその後悔の念は、抹消。

瀬七が髪の毛を集め終わり、俺の持っていたちつとりに入れる。それを持って教室前方にあるゴミ箱に入れようとするが、いったん休止。

「…………あのさ、瀬七。ここに入れたら朝大量の髪の毛がゴミ箱に…? みたいな感じで、騒ぎになるんじゃねえか?」

「そだねー…………じゃあ、食べる?」

「なんでだよー!」

もう変な返事する瀬七嫌だ!!

考えるのも馬鹿馬鹿しくなったから、ちつとりごとゴミ箱へ放り投げる。

ガコン、と音を出しながらゴミ箱の中にちつとりが綺麗に納まる。それを無視して席に戻った。

……ちつとりを戻せって? 汚いから無理無理。

「はは、不良だ」

「つるつせえ」

机の上に置いてあつた鞄を掴み、瀬七を置いて教室から出て行く。ちょっと待てー！ みたいな声が聞こえた気がするけど、無視。階段を下りようとしたりして、瀬七が追いついてきて隣に並んできた。

「お前は彼女か！」

「ちげーよー！」

「だったら隣に並ぶな！」

「いーじょんどうせ行き先同じだしー。」

ああああああと囁き合って、黙ながら校舎から出て校門を出る。

校外に出ると騒いでいる人と田舎の喧嘩、自然と言い争いも納まる。

今日の夕飯何にしよー、とか課題めんぢー週末課題めんぢー、みたいな。

他愛もない事を考えながら瀬七と会話しつつ、のろのろと帰る。

「じゃ、またな」

5分も歩かないうちに瀬七と別れる。

さつさと帰るつとする瀬七を、なんとなく引き止めた。

「なんだい？」

「あー……あのさあ、俺、びついたらいいと思ひ?」

「何が? 課題?」

「ちがわい。鎮西のことだよ」

ああ、と瀬七が納得したように頷いた。

今日は木曜日。明日は必然的に金曜日だから、教室で鎮西に会つ。いや、その前に本当に鎮西と北上つていうやつがいるのか、確認しなければいけない。

クラスのやつの名前を覚えているか指を折りながら考えていたら、両手で足りた。

自分で考えていて空になつたが、クラスに何人いるかが分からぬ。

取り敢えず、その十人がクラスメイトつてことにしておけ。

「やつてみるだけの価値はあると思つよ。

そりやあ君が納得しきつていなければ、分かつているけれどね。
上手くいけば友達ゲット彼女ゲットー、みたいな感じで一石二鳥
じゃないか」

「そういうけどさあ……」

「僕もこの件には関わっているんだから、たまには相談に乗るよ。
頑張れよー富本。応援してるから」

じゃ、と言つて手を振りそのまま瀬七が小走りで帰つていく。
どこまでも我関せず、みたいな態度をとるから何時まで経つても
も掴み難い。

それが瀬七なんだけど。

いや、それは個性でいいと思つけれど、もう少しつと親身になつて
考えてくれないか、と思う。
仮にも親友なんだしさあ。

とぼとぼと歩いている内に家に辿り着いた。

俺の家はどこにでもあるような普通の一軒家で、茶色の塗装をして
ある。

それに加えて小さな庭と駐車場があるから、まさに一般家庭。

ガチャガチャと鍵を開けて家の扉を開け、ただいまー、と家の中
にいるであろう人物に向かいつ。

「ただいまー……あ？」

俺の目線は玄関から上がり廊下になつている場所に注がれる。

そこには、人が倒れていた。

「何やつてんだ……」

倒れていたのは、五歳年上の姉だつた。

俺とは違う、金色ではなくて綺麗な紫色の髪をしているが、今はうつ伏せになり、髪を振り乱したよつて廊下に広がつてゐる。

姉の髪は長く、ひどく邪魔だ。

「先ず靴を脱ぎ、髪を踏まないよつて手で摘み上げる。

しかし、ここで予想外の展開。その髪の毛は姉のばつたつと切られた髪の毛だつた。

故に、髪をぐつと持ち上げても姉が痛がることもない。

今日は厄日とかじやなくて、断髪テーなんじやないかと一瞬思つた。

「おー……おー……

肩を揺すつて姉を起こしてみる。

軽く揺すつても起きず、姉の体が揺れるほど揺するとよつて起きた。

百年の眠りから覚めたよつて顔をのつたつと上げ、右手で田を擦る。

「…………おーおーおー

「何やつてんだよ

「えーびーぞーじー」

は？？ と言ひ言葉通り姉がえびぞりをした。

お前それは無理があるだろー、みたいに変なえびぞりではなく手を使わずに足と頭が付いている、綺麗なえびぞりだった。

綺麗なえびぞり、というのは俺もよく分からんが取り敢えず、綺麗なうつ伏せブリッジ、みたいなイメージでいいと思つ。

それから姉はなぜか腹でジャンプし、高く飛び跳ねる。

ジャンプするとえびぞりの体勢を崩し、綺麗に両足で着地する。飛び跳ねると同時に髪の毛も一緒に上に飛んでしまい、ワンテンポ遅れて髪の毛も地面に落下。

「お見事」

「でしょー」

「ところど」

「はい」

「これは」

「なんでしょーかつ」

「髪の毛だ」

「せーかいつ」

まつたく感情がこもっていない拍手をぺすぺすと送られる。「リリも嬉しくなんかなかつた。

出来の悪い姉を持つと弟は苦労する、とはよく言つたものでその言葉の意味を俺は今、よく理解した。

今までだつてこうこう面倒なこともあつたが、その度に親父か母さんが説教していたから、何とかなつていたようなものだ。

だが来週まで、二人とも仕事の都合で帰つてこない。
その間俺はこの引きこもりの姉を世話しなければいけないので。

しつかりしろ、俺。

「片付けてください」

姉の拍手に対抗するように、俺も一回パンッ！ と手を叩き空気を変えた。

姉はぶつぶつ言いながらしゃがみ、自分の長かった髪の毛を手で摘んでは自分の脇に積み上げている。

髪の毛の量自体は少ないのに一本一本は鬱陶しいほどに長いから、すぐに小山ができる。

しかし姉の行動はのろのろしたもので、遅い。
大半は途中から手伝った俺の成果だ。

先ほども言つた通り、俺の姉は引きこもりだ。

二一ト、とも言える。

なぜ姉が引きこもりなのか、ということを俺は知らない。
けれど俺が記憶している限りでは、俺が小学六年生、姉が高校二年生の頃から引きこもりだ。

つまり俺たちの年の差五年前から殆ど引きこもつてゐる、というわけ。

姉がそれだという事に気付いたのは中学生になつた頃で、その時には、姉は既に高校を中退していて、家籠りの準備が万全だつた。
それからは殆ど家から出ず、外に出ることが週に一回位なのが普通になつた。

何年か前、姉に家で普段何をしているのか、と聞くと超健康的な答えが返ってきた。

まず、6時起床。この時点で健康。

俺が起きるのは大体平日でも7時でそれからパッと準備をして登校している。

しかし姉は違う。

起きた後は、部屋に備え付けの地デジ対応済みのテレビでニュースを見て6時半になつたら番組を変え、朝の体操を一番までしつかりやつているらしい。

朝の体操とか懐かしすぎてどんなのかは忘れたから、今度一緒にやつてみよう。

朝の体操が終わると次は柔軟体操をすると言つていた。

それから一階に下りて、朝食を自分で用意して食べている。

用意、といつても姉は壊滅的に料理ができないから、少し焦げている焼いた食パンを食べ、牛乳をコップ一杯だけ飲むだけなのが。

しかし、健康的なのはここまでだ。

この後姉は昼食もとらず、俺が帰つてくるまでずっとテレビを見ているか、ゲームをしている。

姉は細身でとても痩せているが、高校生男子以上によく食べる。大人、だからね。

朝は食欲が無いからあんな簡素な朝食なんだ、と言つが単に料理ができないだけだろうが。

ふざけんじやないよ。

昼食もとらず、お菓子もアイスも食べない姉は、空腹で家の中でもつ倒れしていることが多い。

帰つてきたら殺人現場跡、みたいなことがあるから何とか姉に料

理を教えるとしたことはある。
しかし無駄だった。

何か一つ教える度にその前のことを綺麗さっぱり忘れる、という大変素晴らしい記憶能力を持つていたからだ。
その姉のおかげ、というわけではないが俺はそこそこ料理とか家事が得意な高校生男子と化していた。
なんとも嘆かわしい事態だ。

そんなこんなで五年の年月が過ぎ、今に到る。

因みに夜はヨガして、俺が太極拳の構えを一緒にとつてから夜中の2時頃に寝ているらしい。

らしい、というのは、俺が最後まで一緒に太極拳なんざやつているわけではないからだ。

しかし、こんな時間に寝て6時に起きられるのだから羨ましい。

さて、皆さん。

どうして、先ほどのえびぞり腹這いジャンプを、一ノートで引きこもりの姉ができるのか。

お分かりいただけただろうか。

日頃の体操とか簡単な筋力トレーニングをしている姉はなぜか、超人的な身体能力を手に入れていたからだ。

俺は姉の身体能力に関しては興味が無いが、姉がどれくらい体が柔らかいのかは見てみたい。

もしも人類を凌駕しているとしたら、恐ろしい。

りょうが

「終わったよー」

俺が少し物思いに耽つていると、いつの間にか姉が髪を集め終わつていた。

床屋じやないから髪の毛を捨てる用の「ゴミ箱が壁にあるわけもなく、ゴミ袋を持ってきてその中にビニールを入れていく。

ヘイ大量だぜ。

「そういえばや」

「んー?」

摘みにくい一本一本の髪を、長い爪で器用に摘んでいる姉に問い合わせる。

「何で髪切ったんだ? そしてなぜ倒れてたんだ」

「倒れてたのは一何時ものアレとしてー」

「空腹でぶつ倒れるのが日常になっちゃいかん」

「だまれー小僧」

頭に拳骨を一発おみまいされる。

ゴック、という音がして甲のあの骨の部分が当たつたのが分かつた。非常に痛い。

「いつてんだよ」「み

「だまらつしゃい。それで髪を切つたのは一邪魔だつたからに過ぎないよー。

気分的にここで切つてたけど何時ものアレでぶつ倒れちゃつたのです。

切りすぎたのは一最初にザクツといつたらここで切つちやつてー

あははー、と能天氣そうな笑い声を上げて姉が自分の髪を指す。姉の髪は俺よりも短くて、ベリーショート、とかいうやつだつた。見ようによつては男子でもいけるかもしね。ほら、今流行のドラマとか。

俺は見てないが、姉がたまに録画して見ていのを発見したことがある。

発見、とか言つと姉が未確認の動物みたいだが、もう珍獣扱いしているので多分、動物で間違いないと思う。

そんなに暴れはしないけれど。

ＵＭＡ、ではないことを願おう。

「そーいえばタツキも髪切つてんのねー」

そこで気づいたのか今度は俺の髪の毛を指差し、お揃いだねー、と姉が楽しそうに言つた。

姉は歳のわりに精神年齢が低い。

今は二十一歳だがそれから七、八歳ひいた年齢くらいの精神年齢。興味が無い物は見向きもせず、少しでも興味があればそれにのめり込んで、一、二ヶ月してしまえばすぐに飽きてしまう。

何年か前、姉がハンバーグを好きになつた。

すると次からは殆ビハンバーグしか食べなくなり、作っている両親や俺も姉と同じ物を食べることになるから、栄養が偏り過ぎたりして体調を崩したりすることもある。

ビ、ビタミン！－ ビタミンが足りない！－ と親父が寝言で苦しそうにぶつぶつ呟いているのを、何ヶ月か前に聞いたことがある。哀れ、親父。

じゃあ三人だけ別の物食べればいいと思うが、家族の食事は皆が同じ物を食べるものだ、と母さんが考えているため、別の物を食べる事を頑なに禁止している。

姉のこの性格の原因は多分五年間の引きこもりのせい。だから、猿みたいな興味の持ち方になつたんだと思う。

「お腹空いた」

髪の毛を入れた袋の口を縛り終えた姉がそう言つ。何時もなら母さんが帰つてくるまで我慢しろー、と言つ所だが、今日は誰も帰つてくるはずもなく、俺と料理のできない姉のために俺が、作ることになる。

今は17時くらいで今から作れば、ちょうどいいくらいの時間になるだろう。

そうなれば早速、とキッチンに行き食パンを見つけこれでも食べてろー、と姉に五枚切りの食パンが、まだ三枚入っている袋を投げつける。

片手で器用にキヤッチした姉が嬉しそうに袋を開け、もぎもぎもぎとそのまま食べている。

焼けつての一、食パンくらい。朝いつもなんとか焦がさないよう焼いてんだから。

そう思つたが朝は直感でメーターをセットしてパンを焼いている姉が、夕方でも朝の直感でメーターがセットできるとは思えず、トースターが食パン諸共黒焦げになつても困るから、何も言わないまま大きな冷蔵庫のドアを開ける。

ドアを開ければ春には寒いとも涼しいとも、どちらとも取れない冷気が顔に当たる。

中を見るとパックに包装されている一切れの鮭の切身を見つけた。

よし、今日のメインディッシュにしよう、と思い左手でパックを取り出し、右手で扉の裏側にある卵を三つ取り出した。

あ、落ちる落ちる。

取り敢えずそれらをキッチンの台の上に置き、ブレザーを脱いでシャツを腕捲りする。シャツはまだいいがブレザーを汚したら明日困る。

姉の食べ物の興味は、今は何にも向けられていないから何作っても文句は言われない。だから鮭をどう調理しようか悩む。もう簡単に塩焼きでもいいけど、ムニエルとかでもいいんだよな……。

鮭つてどうして、こんなに簡単な調理の幅が狭いんだろう。

よし今日はムニエルだー、と何の気なしに直感で作ることにした。塩焼きも捨てがたいが、それはまた別の機会に。

パックの包装を雑に開け、鮭に塩・胡椒を適当に振りかける。味付けがどうなろうが知つたこつちやない。辛かつたら飯食べろ、飯。

その味が鮭に染まるまでに米を洗うこととした。時間の短縮は主婦の基本。俺は主婦じゃないが。

シンクの下にある棚を開けでかいタッパーみたいな物に入つて、米を取り出す。

蓋を開け中に入つてているカップに、擦り切れいっぱいまで米を掬つて入れる。

米釜に入れた後水をどばどば出しながら、わしゃわしゃと米を洗う。

三回くらい洗つたら水を切り、炊飯器にセットしてスイッチ・オン。

え？ 洗い足りないって？ 不味かつたら海苔で巻いとけ。味付け海苔。

「俺は料理をしていいんだろうか……」

ふとここで、自分の料理の仕方のいい加減さに気づいたわけである。

まあ、姉も美味しいもんが食いてえとか俺も美味しいもんがいいとか、そういうことを頭に入れて料理しているわけもないから、こんな適当な料理になるなんだけれど。

俺はともかく姉はそれなりに食べられる嫌いな物じやなくて、腹に溜まればそれでオツケーみたいな人だから、俺の料理はちょうどいいと思つ。

考え方をしながら料理をする暇もなく、先ほどの鮭の水分をなんとかペーパーとかいう紙で拭き取る。

こういう料理の器具みたいな名前は殆ど覚えてないが、用途は覚えているからそれでいい。

普通ならここでバット？ みたいなを出して鮭に小麦粉をまぶすんだろうが俺の場合は、洗い物ができるだけ出したくないからパックの中に、直接小麦粉をぶち込んで鮭にまぶす。ここでも適当さ加減が窺える。

フライパンを熱し、油を少しだけ入れる。少ししてからその中に鮭を入れ焼いていく。

中学生の時にこの料理をやつたことがあるが、正式な作り方など

殆ど覚えていない。

まあ、こんな感じかなーくらいの直感料理だ。

冷蔵庫からバターを取り出して鮭にのせる。表面と裏面がいい具合に焼け、皿に適当にのせる。

盛り付けみたいなのは洒落た料理だけでいいから、そんなに着飾つたような皿ののせかたはしない。

フライパンの中に残っている油をティッシュで拭き取り、流しに入れ水に浸けた。

コンロの下の棚からもう一つ小さいつづりフライパンを出し、また油を入れて熱する。

鮭だけじゃ物足りない姉のために、もう一品作る。

まあ、作るといつても玉子焼きだけどね。普通の。

そんなこんなで玉子焼きもでき、野菜室からキャベツやトマトやらを出し水に浸したり洗つたり千切つたりして、玉子焼きと一緒に鮭ののつている皿にのせる。

良い匂いがして吸寄せられたのか、姉がふらつとキッチンに現れる。

食器棚から一人分の箸と茶碗を取り出し、机に並べる。

その時ピー、ピー、という音がした。炊飯器の音で、ご飯が炊き上がったようだ。

椅子に座っていた姉が立ち上がり、自分と俺の分のご飯をよそう。料理はできないけれど、こいつ所で何も言わなくて済つてくれるからありがたい。

「「いただきます」」

向かい合わせの席に座り、行儀よく合掌する。箸を手に取り、ご飯を食べてみると、少し怪しいがちゃんと炊けているようだった。

しばらく黙々と食べていると、普段食事中は喋らない姉が話しかけてきた。

「そーいえばさー」

「なんだよ」

顔を上げ、姉の方を見る。

「私はさーなんで料理ができないんだろうーねー」

長年の問題となっていた姉の問題を本人が問い合わせてきた。いや、そんなこと言われても本人の問題だからなんとも言い難い、というのが俺の答え。

姉が料理できないのは学習能力と記憶能力が非常に欠しいからであって、姉自身が自分で何とかしなければいけない問題だ。

人間の記憶は繰り返し覚えていけば、しばらくは定着するそうだが姉は一週間とも持たない。

これでも姉は成績が良かつたらしく、じゃあその記憶力で頑張れーといふこと。

じゃあさ、これはさ、もうさ……

「知らん。諦めろ」

「何もそんな絶望的な答えかたしなくて……」

「事実だろー」

「それはーまあねー」

鮭を解しながら氣だるげな声で姉が答える。

野菜も食べろ、と箸で野菜をピッとかす。

んー……と姉は、渋々鮭から離れて野菜を口にする。

パパッと食べ終えた俺は流しに食器を持って行き、調理器具(♪)と丁寧に洗う。

ここだけ丁寧なのは、洗つておかないと母さんに怒られるからだ。教師とか友達に怒られるのはいいんだけど、母さんとか親父に怒られるのはや、居心地が悪いんだよな……。

あ、俺怒るような友達いねえわ。

別に友達いねえとかで気分がブルーになることもなく、全部洗い終わってからシンクの周りに飛んでいる水を拭く。

姉の方に振り返る。

「取り敢えず、さ。自分の食器くらい洗えるようになつたら料理できるんじゃねえの? ていうか洗い物できたつけ」

「しつれいなー。洗い物くらいできませーーー」

ブイ、と左手をピースして俺に向けて囁つ。

うん、それなら安心だと廊下に出て、ブレザーと鞄を持って二階の自分の部屋に入る。

それらを適当に床に置いて、ベッドに倒れこんだ。

あー、風呂入らなきやなーと思ひながら人間眠氣には勝てない。
ていうか、何、急に異様な眠氣が波のように襲つてくるんだが。
三大欲求に逆らわず生きる姉のようになりたくないが、これば
かりはなー……。

顎が外れそうになるほどの大欠伸が出て、目の端に涙が滲む。世
界が少しだけ歪んだような気がした。

……全部全部面倒くさい。俺は異世界には行けないので、世界は
歪まないのだ。

そのまま自然と眠りについた。

昔々に読んだ事がある本に、こんな事が書いてあった。

『人間って何で同じ毎日を繰り返し繰り返し、繰り返し続けるのに

どうしていつも飽きずに生活し続けていられるのだろうね

その繰り返す変化のない日常から些細な変化や楽しいこと悲しいこと

苦悩とハッピーを見つけているのが人間よ

そんなのはつまらないね。学校生活然り、社会生活然り
もっと大きな変化を見つけて日々をエキサイティングにするのが人間だ

大きな変化だけが楽しい毎日に直結しているんじゃないわ
じゃあ私がさつき言ったことを少しずつ見つけてみなさいよ
きっと楽しいわ。些細な変化こそ人間の喜びなんだから
そして生きがいでもあつたりするんだわ 』

美しい綺麗事、どうもありがとう。特に女性らしき方。

子供向けの絵本だつたはずだけど、こんなにも小難しい事を書いて誰が理解できるのだろう?

少なくとも、あの時小さかつたあたしにこの話はよく分かりませんでしたが、人生楽しめとか捨てたもんじゃない、ということが言いたいんですか?

そうですか。自殺志願の廃怠者を引き止めようとでも？
じゃあ、あたしは違うのだから好き放題やつていいんですか？
そうじゃないんですか？ ジゃあ何だといつんですか？

とても小さくて些細な日々の変化なんてあるわけがないんです。

毎日毎日違う出来事が起こるから人間は生きていられるんです。
小さな変化しかないとしたら、毎日受ける授業の内容が違う、と
いうことしか思い浮かびません。
それじゃあ、つまんない！！ って思います。

大きな変化は大切です。

毎日毎日別の日だから、友達と話す内容も変わつて誰かに会える
日と会えない日もあって、呼吸をするように盲目的な恋なんかして
玉砕して悲しんで、また、別の恋に移るんです。人間つて、そう
いつもなんなんです。

大きな変化と些細な変化の違いは何ですか？ と問われても
捻くれて頭の悪いあたしには何の答えも出せないけれど

毎日を楽しむ。

それだけでいいと思うのです。

An unknown date
by true character
- - a certain
unknown girl

「もーもひゅーんかーえろー」

臨時のHRも終わり、帰る準備をしていると、琴音が声をかけてきた。

教科書とか色々鞄の中に適当に詰め込んで準備完了。
教室の後ろの扉であやと琴音がもう待つていて、急いで一人の元に行く。

三年生の教室は二階に集まつていて、屋上も微妙に遠くて一階から上がるのもしんどい。そんな微妙な位置にある。

どうせなら、一年の教室がある一階とかキリのいい四階とかにしてほしい。

あー、でも朝遅刻しそうな時に四階はキツいかなー。

そんな事を私が会長とかに抗議したところで、何も変わりはしないけど、生徒の意見とか尊重してほしい。

学校つていうのは民主主義の政治だから一人だけの意見は通されないけど、そういう考え方があるという事くらい

頭に留めておけ、会長。

階段を三人で降りる途中、隣で琴音とりあやがわいわいがやがやがや話している時に、そんなことを考えてみた。

この頭の中討論もどきを聞けば真面目風に聞こえるかもね。

実際私は真面目じゃ「じれこませんけど。不面目不面目。

「あ

なんとなく鞄の中を覗き、教室に忘れ物をしたのに気づく。

「どしたのーももちゃん」

きょとんとしたような顔で琴音が尋ねてきた。

三人とも階段を下りていて途中で降っているから、邪魔になつて
いる。

通行の邪魔になつてとやかく言われたくないあたしは、流れに逆
らかづいて階段を上り始める。

「おー、一 条ビルしたんだー!?

急に階段を上り始めたあたしに驚いたよつこ、あやが慌てて引き
止めてくる。

ええい、引き止めるでない!

そんな事を言えるはずもなく足を止めて振り返る。

「教室に忘れ物したのー!」

「何でちよつとキレてるんだ」

「ここで待つてよつかあ?」

「先行つて。電車遅れたからじつよつもないでしょ。後から走つ
て、できるだけ追いつくよつとするからー」

一人を置き去りにするように走つて階段を上り始める。

じゃあねー、といつ琴音の可愛らしい声が聞こえるけど、この時
ばかりは、無視!

さつきは一階まで降りる階段の途中だったから、またもう一階分

の階段を上らなきやいけない。

さつさと上つて二人に早く追いつきたいところだけど、下校する生徒で階段は溢れている。

その流れに逆らつている生徒はあたしあないから、どうにも進むことができない。

人と人との間を切り抜けなんとか上りきり、教室に入る。

机の中から携帯電話を取り出し、スカートのポケットに入れる。危ない危ない。忘れてたらこの休日一日間を携帯電話無しで過ごすところだった。

魔術を使えない文明人のあたしにとつて、携帯電話は必要不可欠なものだ。

いや、高等魔術師の琴音だつて携帯電話持つてるけど。

魔術師つて携帯電話が無くても、魔術で電波とか電話の回線？に直接アクセスしてそのまま話せるらしいし。

何回かそういうことがあつたけれど、携帯電話を通じて話すよりも声が鮮明だつたのは記憶に新しい。うん、昨日の事だ。

他にも忘れないか最終確認をして教室を出る。

走つて追いかける、つて言つたけど走るのつて面倒だし駅前の大通りに出たらどうせそこですぐ別れるし、追いかけなくともいいかな、と思う。

あたしはあたしのペースで、自由に帰るつ。

友達がどうでもいいとかそういうことじやない。

あたしがマイペースなんだ。B型です。

しばらく廊下を進んでいると、背の高い男子と一年生の女子が話しているのが目に映つた。

男子の方は同級生で知り合いだから、何があつたのかと思い聞き

耳を立てる。結果、何も聞こえなかつたけれど。

二年生女子がお辞儀をして男子と別れてから、さうに向かって小走りで走ってきて、あたしのクラスの三つ隣の教室にこよおずと入つていつた。

あたしのクラス＝四組
三つ隣のクラス＝一組

ということは、二年生女子は一組に入つて行つた。
途中ですれ違つたけれど、全く知らない顔。
けれど、どこかでみた事があるような誰かの面影がある顔立ちだつた。

どこで見たつけなー、誰かに似てるよなー。
そう考へながら背の高い男子に、抜き足差し足忍び足で徐々に近づいていく。

昔の浮氣

「ユタ、見ちゃつたよー」

背の高い男子こと、浅木悠太の背中をぽんぽんと叩いて呼びかけ
る。

琴音の声遣いを意識して、少し琴音の口調を真似て。

すると、ピクーッと肩が震え上がり、ゆっくりと悠太が振り返る。

「……っはー、んだよ一條かよー、てか、ユタって言ひんじえねえ
！」

「一條で悪かつたわね。可愛いじゃない、ユタ。琴音の方がよかつ
た？」

「いえー、滅相もない。あー、一條さんでよかつたなア」

「棒読みすぎて感情が伝わってこないじゃないの」

ユタ、という自身のあだ名に對しては何も言わなくなつた。

それにしても、悠太が振り返った途端失礼なことを言つてくれる。
謝罪の言葉も棒読みにしか聞こえない。

悠太は背が高くて話す時も首を上げて話さなきゃいけないから、
とてもしんどい。

身長180?つて化け物か。そんな長身の悠太は、琴音の彼氏だ。

「琴音に言いつけるわよ」

「何をだよ」

「さつきの女子のこと」

「俺は女子と話すことも許されないのか!?」

「一年生だったからね。話すなら三年にしなさこよ。口コロン疑惑？」

「違うー！」

あたしの冗談に悠太は全力で否定するように、首を勢いよく横に振る。なんかもう、速く振りすぎて残像が見える。
琴音に女子の事を伝える。それだけでジルバが嫌がっているのは、彼女の琴音はとても嫉妬深いというか、妄想癖だから。つまり、女子と話してたら「浮気だー！」と琴音が大騒ぎするのだ。

琴音と悠太は、中学生の頃から付き合っている長寿カップルだ。そのまま一気にゴールイン決めたれ、と言いたくなるほど、まだまだ熱も冷めてないお熱いアベックだ。カップルって言つのかこの場合は。

あたしは去年彼氏ができたばかりだけど、この一人の熱さには到底勝てそうにもない。

でも、ラブラブなことはいいことだよね。めでたいし。
あたしはまだ見たことないけど、悠太は喧嘩つ早くて、誰かが目を離せばどつかに行つて喧嘩とかたまにしているらしい。
そんな悠太だけれど、琴音には頭が上がらない。

これはほんの一事例。

昔々、と言つても一年位前だけれど、一年生の頃の冬のある日。悠太に彼女がいるのを知らず、告白してきた同級生がいるらしい。この時の悠太は学年の中でも問題児になっていたけれど、この年

頃の女子は

ちょっとワルい男子とその高身長によつてカツ「よさが一割り増し
されていて男に惹かれるらしく、悠太はそこそこモテていたらしい。
その時期はあたしもクリスマス前っぽく、告白ラッシュでした。
全部断つたけれど。これは、一余談。

その告白を誰かを介して聞いた彼女の琴音が黙つてているはずもなく、すぐに悠太の元に行き浮氣したのか、と問い合わせたらしい。
この時点で琴音に伝わっている情報が間違つてゐるけれど、そんな琴を嫉妬心で心も体も染まつてゐる琴音が知る由もない。

弁解空しく悠太が負けた後に琴音の言つた置き台詞が

「ユタは、琴音よりシチューの作れる家庭的な女の子の方が好きな
のね！！」

だつたらしい。

意味不明な台詞だつた……と、ユタこと悠太は後日あたしに泣き
言を言つきましたとさ。

「勘弁してくれ……それだけは……」

悠太が背中を丸くし、苦悶の表情を浮かべた。その体勢と負のオーラが悠太を覆っていることもあり、いつもより小さく見える。

あの、問題児、浅木悠太が、弱っている!!

それだけでなんだかとても楽しくなってきた。

サドつ氣があるとかそんななんじやないとは思うけど、普段粗暴な人間がこんなに弱っているのを見るのは楽しいもんですよ。

「じゃあ、琴音には教えないから」

「助かる、一條……ん？ から？」

あたしが琴音には浮氣現場（嘘）の田撃を教えない、といつ皿を悠太に伝える。

しかし、それだけですまないのがあたしであるのだ。

あたしが口にした言葉に対して、悠太は眉を顰め不思議そうな顔をする。

「チヨコパー杯」

「よし、分かった」

琴音には教えない交換条件として、チヨコレートパフェを奢れ、
とこののを出す。

「あら、意外とあつさつしてる」

「黒崎のヒステリーが俺に来ないなら安いもんだろ」「どうぞ前のカワヒの女」

「はあ? つざけんなよ! あれ一杯七百円もするんだぞ! ?」

いじやないそんぐらい！ ケチケチすんな！」

悠太と交換条件について互いに叫び合いながら討論する。

！ と云つ。 懸念は「ハーツ」のハーツはして
あたしは条件を呑め！ と言ひ。

二。立義。立道。

だけどね、あたしはチョコが一番好きなのよ！――

「あ、――つつ――！ もう、分かつたわよ！」

それならアミーバー人で食べて喜び勘すればいいんでしょ!!

「んな、二!?」
んな」としたらあいつ、萌さんとられた」とか言

「ノーマン・アーヴィングの小説」

「チッ……分かつたよ。その代わり、三分の一、お前ちゃんと払え

卷之二

ハンッ！　ヒ踏ん反り返つたよつにあたしは笑う。

えー、五分ほどの討論を終え、無事に交渉が成立しました。

オメテトウ、あたし、」「ちが条件出したのに代金払うのは嫌だ
けれど、普段より安くチョコパが食べられるのならその条件呑んで

やうやく。

いや、割り勘しようつてのはあたしが言つたんだけれどね。

因みに、あいつ、とか雅斗、ところはあたしの彼氏の事であり、うんまあ、付き合つてゐるわけである。彼氏だから当然だけれど、その雅斗について一言で表そつ。

“男の娘”。

「それで、いつ行くんだ」

ハーツと重い溜息を一つ吐き、悠太が茶色に染めた頭をわしわしと搔きながら言つ。

悠太は髪が短いから、搔くつていうか掘んでいるようなしか見えない。

硬そうですね、その髪。

「日曜でいいでしょー。あんまり遅かつたら間違つて琴音に言つかもしれないしね？」

「いいかお前、言ひなよ、絶対に言ひなよ。もしパフュ奢つてから言えば、お前もう絶交だからな」

「切るほどの縁が無いと思ひますけど」

鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をして悠太が驚く。

まあ、そんな表現を使われるような顔をあたしも初めて見たわけだ、面白い。

あー、あー、と悠太が言つてくさつて口を開く。

「 そ う だ つ た な …… 。 お 前 は 黒 崎 の 友 達 で 、 僕 の 友 達 つ て わ け ジ ゃ
な か つ た な 」

そ う そ う 、 あ た し は あ な た の オ ト モ ダ チ で は な い ん で す 。
あ た し に と つ て の あ な た は 、 た だ の 知 り 合 い で 、 親 友 の 彼 氏 つ て
だ け な ん で す 。

「友達、じゃないんだよ」

口に出して悠太に告げる。

気ままずやうに田線を逸らされ、10秒ほどの沈黙が続いた。ふと窓に田をやると、たくさんの生徒の中にあやと琴音の姿が確認できた。

「琴音、そこにいるね」

「…………そうだな」

同じ景色を見ていたのか、誰に向けるわけでもなく呟いた言葉に悠太が反応する。

琴音だけを見下ろしているだろうその目は、なんだか切なそうに見えた。

いつもなら、琴音がいきなり悠太に抱きついた時も、迷惑そうにしていてもその表情はにやけていてその黒い瞳は少し嬉しそうにキラキラとしているのに。いつもと違う悠太の目に少し戸惑った。

「さっきのは、北上の妹だ」

琴音たちが窓を介して見える景色の中から見えなくなつた頃、悠太が唐突に口を開いた。

「」つちに向き直つたその顔は、いつもと同じ無愛想だけれどいか親しみやすそうな顔も、田つきの悪いその黒い瞳も。

いつもと同じ、変わらない。

口調も声の明るさも同じで、いつもの中太に戻つてゐるようだつた。

「さつきの黒髪が？」

「黒髪つて……まあ確かにそつだけどな。

顔立ちはあまり似てないし、髪の色は正反対だから違つと思つたんだがな。

北上のこととは兄さんとか言つて、苗字も北上らしい

「へえ」

予想外の新情報に意表を突かれた。

ついでに先ほど見た黒髪の女子の姿を思い浮かべる。……うん、俯いていたから顔なんて覚えてるわけないわ。

淡々と語る悠太の言葉に合わせるように、一定のリズムで相槌を打つ。

「……」で、北上こと北上醍輝だいきの話をじみつ。

北上醍輝。三年一組。十七歳。男。銀髪。茶色の瞳。身長体重座高視力、全て不明。

恋愛遍歴は非常に多彩。友人情報によると、三年間で約十数人の女子と交際と破局を繰り返しているとか。

しかし現在は女の匂いがしないため、交際している女子はいないとみられる。だって。

そんな遍歴に見合つよつなとてもカッコいい容貌。

銀髪と茶色の瞳の組み合わせは、一部の女子の受けもいよいよで

ある。

更に文武両道なためそれに惹かれた女子も多い。

北上は告白されれば断らない性分のようで、誰かが好きだ、というような彼自身の話は聞いたことが無い。

繰り返される破局の半分以上は北上から別れを告げているらしい。理由は不明。

しかし破局後の女子は付き合っていた当時と変わらず、彼を好きなようである。

それだけ。あたしが知っているのは「」まで。彼もまた、悠太と同じで、友達ではない。

強いて言つならば悠太と、あたしの彼氏の共通の親しい友人だ、ということだけ。

彼とだけはあまり話したことが無いし、話していく楽しくなるような会話は無かつたような気がする。

あと一つ知っているのは、あやの幼馴染だと「」だけ。

以上、あたしの脳内北上醍醐講座終了。

「さつき北上がいるかどうか聞いてきたんだ。一組にいると思つが、見に行つてみるか？」

あたしの右後ろにある一組の扉を指差しながら悠太が言つ。

顔だけ扉に振り向かせ、悩む。

今、北上兄妹に会つたところであたしは「一人に話すことなんて一切ない。

それどころか話すのが苦手な兄と少し話したことがあるからといって、そんなに話が続くものじゃないし、兄があれなら妹も苦手だろうと勝手に推測。

でも、もし妹の方は明るい人なら話すに値して惜しいことしたない、って後悔するかもしれない。

それは、嘘なんだけれど。

「んーん、やつぱりいいや」

「そう、かい」

顔の向きを戻して首を横に振る。

悠太が扉を指していた指を曲げ、力なくだらりと右手を下げてポケットに入れる。

その何気ない一連の動作さえ、なぜかもどかしい。心の中が少しむずむずするような、そんな感じ。

人はこの奇妙な感覚を恋だと言つけれど、そうではないと信じたい。

だつて、悠太は琴音の彼氏で、あたしにも彼氏はいるんだから。

「んじゃ、そろそろ帰れよ。俺は用事あるからまだ帰れないけど」

「そう、じゃあまた日曜日に。すっぽかさないでよね」

「すっぽかさねえよ。それなりに金持つて行つてやる」

「じゃあ全額払つてよ」

「それは嫌だ」

少しだけ笑いあつて、手を振つて別れた。

あたしはそのまま前に進み、悠太はあたしが来た方向に向かって歩いていく。

体が触れないような微妙な距離感で、交差する。

「友達じゃあ、ないんだよなあ」

ふと呟く。

学校の敷地内から出て、朝とはまったく違つスロー・ペースな一足歩行で家までの距離を縮める。

朝も、もちろん一足歩行だつたけれど。

悠太に言つた言葉をもう一度呟いたのに意味なんてない。
もしかしたら、あんな風に悠太の弱みに付け込んで、パフェを奢つてもらつのも意味はなくて、弱みに付け込むこと自体意味はなくて琴音と悠太がこの先どうなるつとあたしが関わる事じやなかつたりしたら、それこそ意味のない事を繰り返してきたことになる。

『つまり、君のすべてが無意味で無味無臭なんだねッ！』

ええ、 そうかもね脳内マイダーリン。

鬱陶しいから少しだけ黙つてちょうだい。

無味無臭なんて形すら実在しないあなたに言われたくないわ。

あたしはついに頭でもおかしくなったのか、突然現れた脳内マイダーリン（仮）に文句を言つ。

四月も後半になつて少しだけ春が終わりそうな予感がする。

今年は暑くなるのが早いのか、少しだけアスファルトから来る熱気につだりそうになつた。

照りつける太陽の暑さにも負け、立ち止まってブレザーだけを脱ぐ。

ブレザーの下にはカーディガンも着てたから、暑いのは当然。

あたしのカーディガンは茶色の長袖だけれど、黒じゃなくて本当によかつたと思う。

黒ならさらに熱を取り込んで暑くなること間違いなしだ。
来週からはカーディガンだけにしよう。うん。

鞄を肩にかけ、その鞄とあたしの体の間にブレザーを挟み、再び歩き出す。

歩くのが遅いのに定評のあるあたしは、15分位かけて家に辿り着く。

相変わらずひつそりとした佇まいの小さな家だ。

一般家庭にあるような家に見合つ小さな駐車場には、もちろん車なんか止まつていない。

門を開ければ少しだけ植木鉢が並んでいる。

中には肥料と土が植木鉢らしく入っているけれど、その中に美しい花を咲かせる種子は入っていない。

それどころか、土は最近雨が降つていないのや水をやつていないのも相対して、乾ききっている。

花を嗜む趣味のないあたしにどうては、当然の結果だ。

スカートのポケットに入っている携帯と同時に小さなキーホール

ダーの付いている、家の鍵を取り出した。

右手の中指と薬指と小指で携帯を持ち、残りの一本の指で鍵を持

ち、苦戦しながら鍵をガチャリ、ガチャリと開ける。

ワンドアツーロック。防犯対策もばっちりだ。

鍵を持ったその手をもう一回スカートのポケットに入れ、それらを中に入れて手を引き抜いてから家のドアを開ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5117y/>

でいぱいyouth

2011年11月27日12時53分発行